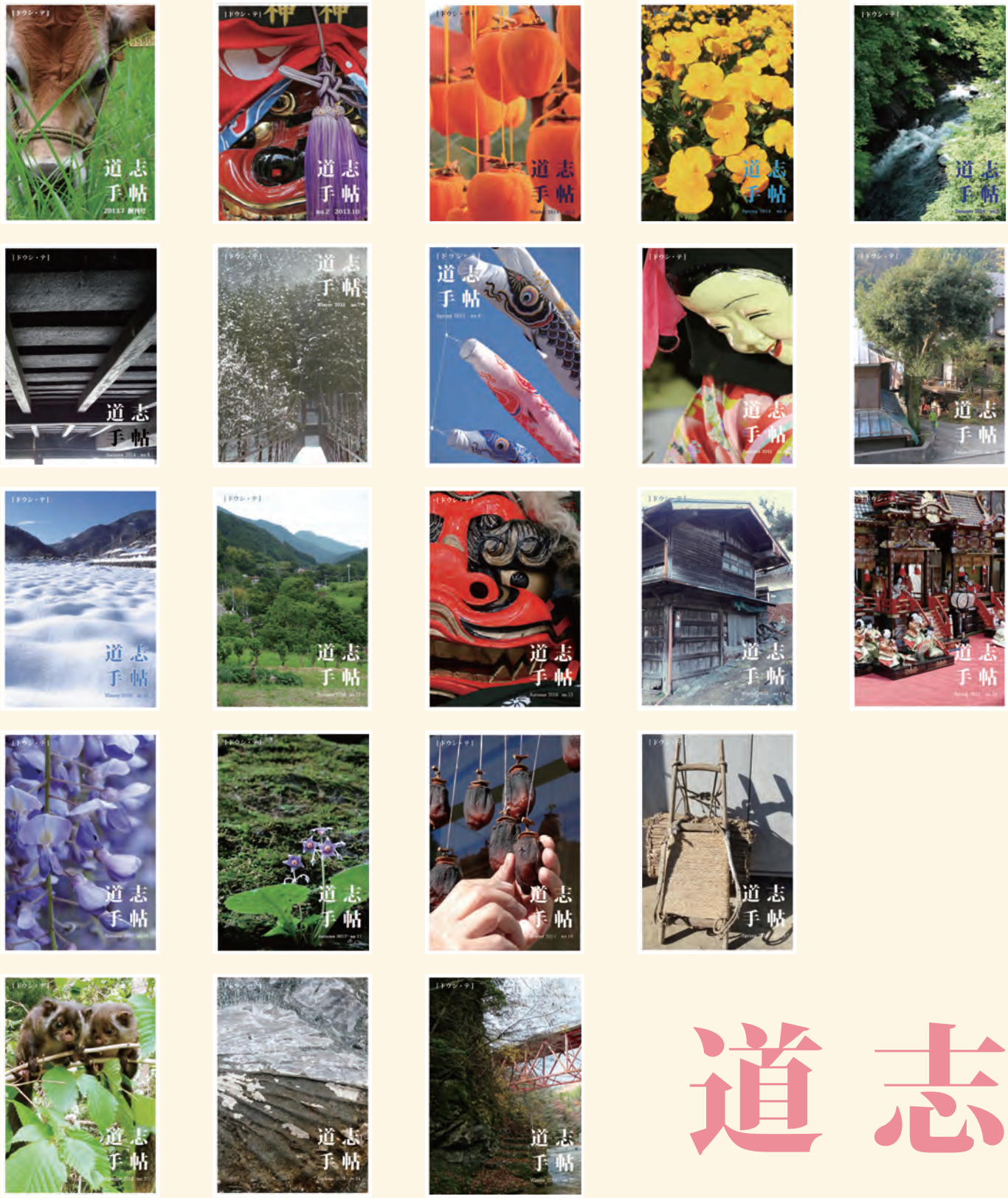
[ドウシ・テ]



道志手帖

Spring 2019　no.23

道志の民話 ⑤ 宝永沢のまぼろし道(小善地)

宝永沢のまぼろし道

宝永沢っちゅうのがあるだわ、古戦場(小善地)のこっちにな。そこを、正月の四日かな、やはりお年始に行って、まあ、酒に酔ってただなあ。その宝永沢のがけを落って、亡くなった人があっただよ。まあ、わしらも見付けぇいったちころが、下に落って亡くなってただよ。

それが、その幾年あとかなぁ、今ぁもう亡くなった高林一行和尚がよぉ、そこの角へさしかかったら、ずうっと道がある。こう、いい道が開けてるだと。それで、光で、杉がよう、こう、明りに照らされて見えるだと。いくら落ち着いても、きれいな道が見えるだと。

こりゃあ、どうも不思議だなぁっちゅのんで、大椿い回って、富士見荘からちょうちん借りてきたちゅう話しただよ。

まあ、ほんとは道のないところに、そういう現象が現れたっちゅうことだ。

そのまんま進んでったら、がけに落っこっちるとこだったな。

作画　仲井義晶／出典　民話の手帖 49 号（1991）「道志の民話」より

道 志 手 帖

Spring 2019 no.23

Contents

最終号によせて

『道志手帖』は、道志村地域おこし協力隊の活動報告の場として発行してきました。2019年3月、協力隊の任期満了に伴い役目を終えます。

『道志手帖』の略称「ドウシ・テ」には、「どうして？」という意味が込められています。それは「どうして道志に暮らすのか？」という問いであり、その答え（道志の魅力）を記録し伝えることが本誌の一番の目標でした。

今まで発行を支えてくださったみなさまに感謝申し上げます。6年間にわたるご愛読ありがとうございました。（香西恵）

What's "Doshi-techo"?

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしってどんなところ？」という関心から生まれた、道志村地域おこし協力隊を中心とした有志による冊子です。村で生活していて気になったこと、おもしろいなとおもったこと、発見や驚きを、年4回報告していきます。2016年度からは新しい書き手による誌面をお届けします。

［特集］

第二期道志村地域おこし協力隊
3年間の歩み

道志で生活していきたい
出会いを糧にこれからもこの場所で　―鳥澤拡太　…4

クレソンにたどり着いた3年間
遊ぶような山暮らしを仲間とともに　―七瀧佳至　…6

その土地でともに生きていることが価値
蜂と森の循環を力に
―抱井昌史　…8

［連載］

道志の民話⑤宝永沢のまぼろし道（小善地）　仲井義晶　…2

どうしの山 山みちマップ⑪御正橋～御正体山～道坂峠　石川敬子　…14

お仕事拝見⑫フォレストファーム 中垣勝弘・和子さん　仲井義晶　…16

みなもと体験館イベント参加⑪彫るⅡ　佐藤八重子　…16

道志で生活していきたい
出会いを糧にこれからもこの場所で　―鳥澤 拡太

（2018.12.10　焼き芋販売初日。川原畑にて）

「道志で生活をしたいために協力隊になった」。道志に移住してきた時点で、すでに夢が叶っていたという鳥澤さん。だから最初は途方に暮れたらしい。「（協力隊の活動目的として）農林漁業の6次産業化（※1）っていわれても、何やればいいのかなって」。

悩みながら活動をスタートさせた1年目。ほかの隊員が畑や養蜂を開始するなか、ともかくさまざまな加工品づくりを試すことにした。キュウリのぬか漬けから始まり、大根のビール漬け（横浜市栄区民祭りで完売）や、大根とゆずと梅干しの「道志ピクルス」を試作。さらには道志の鹿の革を使ったレザークラフトにも挑戦。しかし、どれも思うような味にならなかったり、販路探しに行き詰まったりして、新しく試しては諦めることの繰り返しだった。そんななか「村の人から遊んでいると思われている」との評判に危機感を抱き、「何かやっている姿を村の人に見てもらいたい」と思い、畑を始めることにした。

活動2年目、初めての畑づくりは、耕作されていなかった荒れた畑を開墾するところから始まった。苦労して岩や小石を取り除いて整備し、最初につくった作物はジャガイモ（友アユ釣り大会の参加賞として提供）。続いてサツ

※1　6次産業化とは、1次産業を担う生産者が、生産だけでなく、加工（2次産業）、販売（3次産業）まで一貫しておこなうこと。
※2　買い物ツアーとは、一人暮らしの高齢者など、買い物に行くことが困難な人を対象に実施されている村の事業。

趣味を活かし、ミニ四駆をつくって走らせるワークショップを企画・開催。親子で楽しんでもらうことが出来た。（2018.6.16　みなもと体験館にて）

キクイモを始め、つくった野菜のほとんどを「道志野菜」として「横浜ビール」のレストランで使って頂いた。（2018.9.7 集荷日に村内生産者仲間と）

マイモ（冬に焼き芋にして村内で販売）やキクイモ（横浜ビールに出荷）、役場産業振興課から管理を任されたトウモロコシや、ナスやトマト（紅椿の湯で販売）、秋にはブロッコリーなど。どれも立派に育ち、たくさん収穫でき、初めての畑づくりは順調に次の年を迎えた。

ところが活動３年目は、農業の大変さを実感する出来事の連続だった。新しく借りた畑で焼き芋用に植え付けたサツマイモをイノシシに荒らされ、３分の２が駄目になってしまった。また、強風で獣除けの柵が倒れ、収穫前のトウモロコシを小動物に食べられ、１本も出荷することが出来なかった。

前年大量に収穫し、横浜ビールに出荷して冬場の収入源となったキクイモは、作付け量を増やしたものの、ほかに出荷者が増えたため、思うような量を出荷することが難しくなった。

２年目の冬、初めて６次産業化にこぎつけたのが、焼き芋販売。しかし３年目は収穫を見込んでいたサツマイモの量が確保出来ず、芋を仕入れて提供することに。販売場所を見直し車で立ち寄りやすい場所に変更したおかげで、前の冬よりも売り上げは倍増したものの、目標としていた金額には届かなかった。夜は客足が途絶えてしまう道志での商売の難しさを感じている。

＊

初めての経験に失敗と挑戦を繰り返してきた３年間。暮らしの面でも初めてのことはたくさんあった。特に、初めての一人暮らしは最初とても孤独だったという。しかし、それを村の人に相談してみたところ、少年野球団のコーチを勧められ、以来コーチとして毎週練習や試合に参加し、子どもたちを通してさまざまなつながりが出来た。ほかにも、月に一度の「買い物ツアー」（※２）に毎月必ず参加し、送迎の手伝いをするなど、積極的に人の集まりに顔を出す事で、たくさんの知り合いが出来た。今では個人的に村の人から手伝いを頼まれることもしばしばだ。

＊

道志に移住してきた時点で夢が実現していたという鳥澤さん。道志に来てからは６次産業化の難しさを身をもって知った。しかし、道志が好きで「道志で生活していきたい」という思いは今も変わらない。任期を終える今、叶えたい夢がある。

「これからも道志で、ゆくゆくは結婚して、家族と道志で暮らしていきたい」。

文・写真　香西恵（４～９頁）

クレソンにたどり着いた３年間
遊ぶような山暮らしを仲間とともに

―七瀧 佳至

（2018.12.7　クレソンを収穫。川原畑にて）

任期後は有機クレソン栽培をメインの仕事として取り組もうとしている七瀧さん。

クレソンにたどり着くまでは、農業で食べていくことの難しさを知る中で、なんとか可能性を見いだしたいと模索した日々だった。

もともと、農作業は一切したことがなく、なにもかも初めての経験だった。

1年目は、協力隊3人で共同で小さな畑を借りた以外は、本格的に自分の畑は持たず、あちこちの畑を手伝わせてもらいながら、とりあえず何でも経験してみた。初めて自分の手で野菜をつくり、「野菜って出来んのや！」と知った。冬場に何が出来るのか？　という課題についても初めて考えることになった。

2年目は、作物によって収益性が違うので、とにかくやってみないとわからないと思い、畑を何枚か借り、いろいろな作物を一通りつくってみることにした。ニンニク、レタス、玉ねぎ、人参……。しかし、やってもやっても可能性が見えてこなかった。ニンニクは、種代が高く、年によって変動もあり、リスクが高い。レタスはたくさん出来たので、毎朝都留と道志の道の駅に出荷した。しかし、シカによる食害や台風の被害や、自然相手の農業には、ままならないことがたくさんある。

さまざまな色や形の野菜がのびのび育ち、眺めてワクワクする多品目栽培の畑。マリーゴールドを虫除けに植えたが、毎日虫を取る日々。（2018.6.12　川原畑にて）

３年目の畑を始める前に堆肥を仕込み、それを利用して微生物の発酵の力を借りた、温床での苗づくりを試みた。（2018.3.5　温床の地温と苗の成長を確認。神地にて）

心が折れそうな出来事に何度もぶつかった。そうしたことに耐え、なんとか計画どおりうまく出来ても、手元に残る収益は「これだけ頑張ってもこれだけ？」と感じるものだった。

なかなか農業に可能性を見いだせないまま、２年目の冬には、新規移住者仲間とともに、無農薬・無化学肥料・無動物性肥料で栽培した野菜の出荷組合「道志自然農園」を立ち上げる。

これを機に３年目の春から、一つの畑でさまざまな作物を組み合わせて栽培する多品目栽培を開始。こだわりの農法で育てた野菜は、需要のある人には高くても売れる。道の駅だけでなく、藤野の「ビオ市」などに定期的に出店するようになった。

ちょうどその頃、平行してクレソン栽培もスタートした。最初、クレソンは「しんどそうだからやりたくない」と思っていたという。しかし、いろいろやるんだったらクレソンをやった方がいい、というまわりの勧めもあり、やってみることにした。

じっさいにやってみたら、クレソン栽培の大変さはほかの野菜づくりと変わらない。むしろ、クレソンのほうが楽だと感じるようになった。何しろ、収益性が高い、需要がある、ほかに競合する生産者がいない。冬場以外一年中収穫出来る、肥料や農薬に頼らなくても育ち、手がかからない。一つの作業スパンが長いので、常に次の作業を考えて計画的にまわしていく必要がある多品目栽培と比べても楽。そして道志にはクレソンで成功してきたノウハウを持つ人たちがたくさんいる。

３年目にして、農業にようやく可能性を見いだすことが出来たのが、クレソンとの出会いだった。もっと早くいろいろわかるかと思っていたが、農業はやってみないとわからず、クレソンにたどり着くまでにずいぶん時間がかかってしまったという。しかし協力隊だからこそ、たくさんの失敗を経験して模索することが出来た。

これからはクレソンを収入源として栽培規模を広げていき、クレソンに関心のある村外の人たちとも一緒に、まずはクレソン栽培の体制を確立させる。平行して、多品目の野菜栽培も続けていきたい。夢は、道志が再びクレソン出荷量日本一になること。クレソン以外の夢は？

「道志に移住者が増えてほしい。移住者がいっぱい増えて、自分もその中の一人になりたい」。

その土地でともに生きていることが価値
蜂と森の循環を力に　―抱井 昌史

（2017.6.2　採蜜準備。野原にて）

震災後の東北でボランティアを経験し、何でも簡単に出来てしまう街での平坦な暮らしにつまらなさを感じていた抱井さん。「人がやらないことをやりたい」、「人に喜ばれることをしたい」という思いから、道志に移住し、一次生産の仕事をしたいと考えた。

村内で出来る一次生産の仕事は何か。思いついたのが養蜂だった。それまで養蜂に特に関心があったわけではないが、森に関心があり、「森が（人や全てにとっての）スタート」という思いがあった。「都会の人に蜂蜜は喜ばれるはず」、「森から採れたものにきっと価値を見いだす」という思いがあり、養蜂を始めることにした。

まず村内で趣味で養蜂をやっているかたに話を聞きに行った。早く始めたほうがいいと促され、早速ミツバチや道具を揃えて養蜂をスタート。1年目はあまりよくわかっていなかったが、蜜が採れ、無事に越冬したミツバチがダニにも負けずどんどん増えるのを見て「蜂の力はすごい」と感じたという。

2年目は天候に恵まれ、たくさん蜜を採ることができた。しかし、秋に天敵スズメバチに襲われ、ミツバチが全滅。予想していなかった事態に、しばらく動けないくらいショック

特集

養蜂のかたわら、野菜づくりにも取り組んだ。つくった野菜は村内レストラン「おばあの台所」などで使って頂いた。（2017.9.1　おばあの台所にて）

養蜂の繁忙期と畑の種まきが重なるため毎年大変だったが、さまざまな野菜づくりに挑戦することができた。（2017.9.1 富士なすに支柱を立てる。神地にて）

だったという。

３年目は、いちからミツバチを購入して再スタート。前年から越冬させたものと違い、群の数が少なく、まず数を増やすことから始めなければならなかった。さらに4・5月には、なぜか女王蜂が群からいなくなってしまうことが頻発。悪条件が重なり、今年は全然蜜が採れないだろうと諦めかけていた。また、蜂毒アレルギーも出て「養蜂やめたほうがいいかな」とも思った。

しかし、この年採れた蜜の量は、低めに見積もってはいたものの、それを上回る量だった。あらためて、予想を超えるミツバチのパワーに気づかされた。

３年間、一貫して養蜂に取り組み、経験を重ねてくることが出来た。天候など、自分の力が及ばないことに左右され、いつどうなるかわからない大変さはもちろんある。しかしやってみてミツバチの可能性を感じ、生態系の中の蜂の役割を知り、私たちの生活にもたらす恩恵を知ると、ますます可能性を深めてみたい気持ちになった。

同時に、道志で養蜂をやる良さも感じてきた。蜜源が豊富とはいえないものの農薬が少ないことや、横浜の水源であり、森と水の関係が地形的にわかりやすいことなど。

今後は、起業支援金を使い法人化し、合同会社「Ｂｅｅ ｆａｒｍ 道志」を設立予定。収入が安定すれば、養蜂で得た収益を森や田畑に還元し、蜜源となる植物を増やし、豊かな森と田畑と蜂のループ（循環）をつくっていきたいという夢がある。

「道志（地域）の魅力は、そこで（暮らしや農業が）営まれていることだと思う。その土地でともに生きている、生み出されていることが価値だと思う」。これまで、蜜源を増やすとともに、景観や農地保全を目的に、遊休地を耕して花の種を蒔く活動もしてきた。

養蜂に取り組む根本には「いろんな意味でエネルギーとは最終的には森（植物）」という思いがある。人は森とともに生きてきたし、二酸化炭素を吸収するのも森、海を豊かにするのも森。蜂を養うのも森。一方で蜂もまた、受粉で植物を助け、共生している。養蜂を通して森を豊かにし、蜂と森の良いループを、さらにつくっていきたい。

３年間、協力隊をやらせてもらった。その成果を村にどう返していくか最近意識するようになった。養蜂を仕事として成功させることで、村に少しでも貢献していきたい。

道志に来て一番最初に感じた事と、暮らしのなかで変わったなと思う事

鳥澤　やっぱり来た当初と今と比べると、人脈が少しながらも広まったというか。最近は焼き芋をやってるんですけども、こないだも焼き芋をちょこちょこ買ってくれるおじさんが、薪をけっこう使うから心配して薪を持ってきてくださったりとか。村の人の暖かみを改めて感じましたね。田舎ならではのいいところだな、と。

協力隊だからけっこうみんな認知してくれて、いろいろ構ってくださったりしてくれるのを感じています。

ぼくは一年目の夏から少年野球団のコーチを始める事になって、村の小学校の子ども達とすごく仲良くなった感じで、子ども達と仲良くなったことによる親御さんとの関係も少しは生まれたと思ってますね。

抱井　ぼくの場合は特に変わったなというのはないんです。（Q. 不便だなとかは思わなかった？）なんで道志に来たのかなっていうのは、谷があって山があって、山が近くてそういうロケーションに惹かれたのかなっていうところがあるんですよね。なんか環境だったりとか、そういうのが気に入っているのかな。ただ、男目線で、正直そんな

協力隊座談会

道志に暮らして思うこと

役場協力隊担当の佐藤好起（こうき）さんによる司会のもと、３つの質問を切り口に、道志での暮らしについて語り合いました。

に不便は感じてなくて、買い物行ったり食材買ったりするのは基本妻が多いんで、そのへんはどうなのかちょっとわかってないんですけど。

（道志に来る前は被災地の）東北にいたんで、すごい不便な生活の中にいて、小田原とか（街に）帰ってきたときに、あまりにも便利すぎちゃって、ぼくとしてはすごくピンとこないっていうか。逆にそっちのほうが落ち着かなくて。逆に道志にいたほうが（落ち着く）、っていうのはあるんですよ。

七瀧　自分は、道志村に来る事を決めたんは、初めて来たのが真冬のときで、雪が完全に積もっちゃってる状態を見て「ここいいやん」っていう風になって。自分の知らない生活というか知らない世界を知るのが好きっていうのがもともとあったっていうのがあります。

実際住んでみて、やっぱり外から見ていいなって思うのとなかに住んでみて大変やなって思うのはやっぱり全然違うなっていう。それは立地条件っていうところも、もちろんそうなんですけど、人にいかに認められるかっていうのがやっぱりなかなか難しいというか。今、多分全然まだ、あと10年20年やらないと認知してもらえないとは思うんですけど、それがやっぱり、３年目にして、一番大変やなっていうか。自分がこういう動きをとったら地域のためになると思ってとった動きが、けっこう批判されたりとか、この動きは逆に微妙やろって思っても、逆にそれが求められてたりとか、わりとそのへんの感覚の差というか、考え方の差っていうのが難しい。いまだにそれはちょっと悩んでるところでもあって、それは言葉でうんぬんというよりは、住み着いて、「あいつしっかり生活してんな」っていうふうなところを見せていくってことなのかなって。

しかも協力隊ってよりそういうところが着目されるんで、そこはちょっと難しかったというか、失敗はもちろんいっぱいあって、なかなか反省点が多いですね。

仕事に関しては正直、もうちょっと簡単に内容つくれるかなって最初思ってて、いろいろ自分なりに試して考えてやったけど、結局はこの土地に何十年も住んでいる人たちが見いだした方法であったりとか、そういうところにやっぱ行き着いていくのかなっていうようなことを考えて、今はクレソンをしっかりやっていこうと思っています。

（ふつうの移住者と違って協力隊は村の人から）最低ライン求められるとこがあって、自分が考えている最低ラインとは全然別なところにそれがあったりして、村民の人が考えていることとか、「あ、そこなんや」っていうのがかなりあった。次の協力隊にはそれを伝えていきたい。好かれたらすべてがスムーズに回っていくけど、嫌われたら何も回っていかないっていうのが、村の社会やと思うんで。

思い出深い場所はどこですか？

七瀧　家より畑のほうが立地条件よくて、畑をやっているときが一番気持ちいい。家にいるより畑行った方が快適っていうような。それはやっぱりまわりの環境だと思うんですけど。この仕事したいなって思いましたね。

鳥澤　ぼくは温泉です。昨日も紅椿の湯に行ってきたんですけど、温泉にけっこう村の人も来るんですよね。そこでいろいろとアドバイスをいただいたりとか、村の人との関わりが生まれたので、いいですね。

抱井　ぼくは一番最初に（養蜂の）蜂を置かせてもらったところ（的場の遊休地）です。あそこがスタートだったので。

道志に住むときに必要な心がけは？

鳥澤　困ってる人がいたらすぐ助ける。協力。挨拶も大事かなって。都会だと知らない人に対して挨拶することはないですけど、田舎じゃぼくは知らない人でも必ず挨拶するように心がけてますね。あとお年寄りにやさしく。

抱井　ぼくは勝手に移住してきて、軽はずみなことは言わないようにしたいなっていうのはあって。

好きでやってきた移住者と、元々住んでいる（地元の）人と、背負ってるものがやっぱり違うので、やっていくなかで言動の違いがあって、村内の人が嫌な思いをしたりっていうのも多少聞くので。そこの違いがあるのかなっていうのは感じてるんですよね。そこを故郷だと思って村のなかの一員だと思って、村の将来を考えたなかで、生活だったりそういうことをやっていかないといけないかなって。

街で許されて（できて）もこういう村ではだめな（できない）ことってどうしてもあると思うんですよね。しょうがないのかなと。道志村では環境がそうさせてるっていうのが大きいのでそこはやっぱりある程度わきまえないといけないのかなと思うんですよね。

七瀧　自分が思ったのは人間関係が全然違うって。自分が道志来る前、人間関係で思ってたのは、基本的に人に親切にしたらその人に親切にされる。それって直線的な人間関係なんやけど、道志に来たら「この人に親切にしたらこっち（他の人）からまわってきた」ってのが多くて。直線的ていうよりはどっちかっていうと円型の人間関係になってるのかなっていう。そこが面白いところでもあるし難しいところでもあると思うんですよね。シンプルですけど、人に嫌な事しないっていうか、人に親切にする。それをするとわかりやすく返ってくるっていうような場所なんかなと思いますね。

移住者で10年20年住んでいる人もやっぱり言うんですよね「いつまで経っても移住者は移住者だから」って。でも、そこを諦めちゃうとあんまり面白くないんじゃないってのもあるんで、なんかこう、わきまえつつも踏み込んで行くみたいな、すっごい難しいバランス感覚が必要なんかなと。

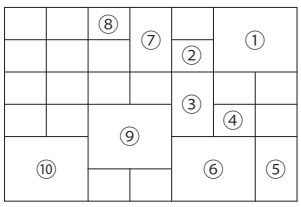
例えば、「頑張ってるね」っていわれてもそこまで「頑張ります！　よっし！」みたいにはなんないけど、「もっと頑張れよ」って言われたら全員に言われているような気がする。全員に言われているような気になると「あの人もおれのこと…」みたいに思ってしまう。そこはなんか図太さも必要なんかな。言う人は言うし、応援してくれる人はそのなかでもいるし、って考えていくべきなのかなって思いますね。

gallery

おびしゃ（長又）

1月17日、長又地区の「森のお宮」で8年ぶりに「おびしゃ」(※)が行われました。弓矢で的を射り、12ヶ月の天候と作物の豊凶を占う、長又の伝統的な行事です。

※前年に集落内で不幸があると行われない決まり。／「おびしゃ」は「御奉射」の字をあて、馬に乗って矢を射る「騎射」に対し、馬に乗らない「歩射（ぶしゃ）」という言葉が由来であると一説にはいわれています。／「おびしゃ」は全国的に行われていた行事で、現在では矢を射る部分は省略されつつも、地区で集まり飲み食いをする行事として各地に残っているようです。／村でもかつては各地でおこなわれていましたが現在は長又地区でのみ受け継がれています。
＊占いの結果、今年の天候は……「概ね平年並み、春先風の吹く日あり　夏場にやや雨が多い、秋はまずまずの天気だが大風の吹く日もあり」。



①②桃の枝を曲げて人数分の弓をつくります。昔はスゲの葉を綯って弦にしました。／③矢はスズ竹でこの日までに拵えました。／④長又の集落の戸数分の弓矢を山の神様に奉納します。／⑤国道側から見たお宮。／⑥皆でお神酒を頂きます。／⑦ 10 年前に皆で立て替えた鳥居。／⑧方角を記した手作りの的を設置します。／⑨準備が整ったら、始めに四方へ向けて若者が矢を放ちます（破魔矢）。／⑩その後全員で交代に弓を引き、矢が当たった場所で、12 ヶ月分の上・中・下旬の天候を占います（合計 36 回）。かつては週ごとに分け、72 回も弓を引きました。占いの後は、皆でごちそうを囲み、一年の予定などを話します。

今倉山へ
都留市へ
道坂峠
ゲート
バス停
国道413号・道志村へ
急
カラマツ
道わかりにくく止めた方が良い
笹の中の踏あと入らないよう
カラマツ
四等三角点
1217.2m
赤松タイ
ジグザグで急
岩下ノ丸
南は植林で展望ない
1303.6m
(板橋)
413
村役場・月夜野
山みちマップ
どうしの山
作画 K-CO
2019.3
時間のめやす
御正橋B・S 2:30 → ← 2:00 白井平分岐 1:00 → ← 0:40 御正体山
1:30 ↑ ↓ 1:30
岩下ノ丸 1:30 → ← 2:00 道坂峠B・S
(白井平)
道志川

御正橋～御正体山～道坂峠

御正体山はルートがたくさんありますが今回は
御正橋バス停から御正体山へ登り、少し戻って
道坂峠へ抜けるルートをご紹介します。
白井平分岐から道坂峠の間はゆるやかな登り下りが多いですが
歩き易い道です。南側は植林が多くほとんど展望はありません。植林の
切れた所から時々丹沢の山並が見えます。北側は自然林
ですが落葉の頃なら大菩薩など北の山々が見られます。
※山伏峠から御正橋へのルートは
2017年秋発行のNo.17に掲載。

この冊子は平成 30 年度地域おこし協力隊活動事業費により作成しました。

道志手帖
［ドウシ・テ］
no.23

発行日　2019 年 3 月 28 日　発行　道志村地域おこし協力隊　編集責任者　香西恵
〒 402-0209　山梨県南都留郡道志村 6181-5　道志村中央公民館 2F
TEL：0554-52-2118　ホームページ：http://www.doshi-te.jimdo.com

お仕事拝見　⑫フォレストファーム（クレソン栽培）中垣 勝弘・和子さん

クレソン農場

フォレスト ファーム

道志に移り住んで32年。化学合成農薬、化学肥料を使わない日本農林規格にも認定され、体にも自然にもやさしい有機農産物栽培を続けています。今現在は富士山の周りにクレソン田も増え、道志村を拠点として、裾野、富士宮、富士吉田の4箇所21圃場にて栽培しています。

作画　仲井義晶

みなもと体験館イベント参加　ドキドキワクワク体験コーナー 11

憧れのスローフード体験、木工体験。道志村に移住してきた私にとって、みなもと体験館でのイベントは毎回未知の事でいっぱい！　私のドキドキ、ワクワクをこのコーナーで紹介します。

彫る　Part II

「彫る Part Ⅰ」では、無垢の欅に字体をなぞる（彫る）作業行程をお伝えした。

今回は字体を浮き上がらせる為、字体の外側を深く彫る作業に入った。さて、完成させようとしているのは「ガーデンボード」。WELCOME という気持ちを込めて庭の入り口に設置したいと思い、作成を始めた。無垢の欅は固く、普通の彫刻刀では私の力ではほとんど彫る事が出来ない。そこで、みなもと体験館から電動彫刻刀を貸していただいた。ボードに彫る字は 「St.Maria に捧ぐる幸福庭」。彫る工程の大変さも考えず、字画の多い文字にしてしまった。彫る間が狭く、かつ多い為、時間を要する事とあいなった。自宅で彫って計 6 時間、みなもと体験館でも計 4 時間、合計 10 時間経過。その時点でみなもと体験館職員の宇野氏からアドバイスいただく。「彫った所はでこぼこにならないよう均一にしていった方がいいです。それから字体の端は丸く揃えた方がいいですね。」。わ～～～まだまだだ！　木の繊維に合わせて彫らないと木肌が荒くなってしまう。逆にいうと木の繊維に合うように彫った時は無垢の欅の板と仲良しになった気分になる。この感覚が生じるとず～っと彫っていたくなる。あのマラソン選手が感じるという「ランナーズハイ」のように、さしずめ「ウッディハイ」である。

しかしながら、電動彫刻刀はちょっと手元をくるわせると、想定していない所を彫ってしまう。字体そのものを彫る事にもなりかねない。慎重に慎重を重ねているので、自然に電動彫刻刀を持つ手には力が入り、指が固まってくる。そこで 1 回に彫る時間を集中できる 2 時間とした。手作りは何でもそうかもしれないが、彫る事もやはりこつこつとした積み重ねがあってこそなんだろう。

完成は「彫る Part Ⅲ」にて紹介する予定だったが、道志手帖の発行は急遽、今号で最終になると決まったとの事。完成したら我が家の庭に設置します。近くにおいでの際、見に来てくださいませ。ようこそ！！　WELCOME です！！（稚拙な文ながら、この小さな寄稿を楽しみしていておっしゃってくださった村民の皆様、また多くの指導を熱心にしてくださったみなもと体験館の職員の皆様に、心から御礼申し上げます。みなもと体験館での体験の数々は道志村に移住していなければ、人生で出会わなかった手に入らなかった宝物です。これからもドキドキ・ワクワクで過ごしていきたいです。）　（佐藤八重子）

道志村地域おこし協力隊

協力隊へのご意見や本誌のご感想をお聞かせください。
お気軽に左記の宛先へご連絡ください。